



News Letter

No. 4 March 2005

21st Century COE Program
Center for Evolutionary Cognitive Sciences at The University of Tokyo

進化の理解はなぜ困難か



波多野 諠余夫
(放送大学)

世界のいくつかの側面についてヒトは、学校教育を受ける以前から、観察される現象への予測や説明を可能にする、ある程度首尾一貫した知識の体系を持つ、とされる。これは素朴理論と呼ばれるが、発達研究者の間では、素朴物理学と素朴心理学に続いて、素朴生物学もおそらくかなり早い時期から成立しているとみなされている。進化認知科学から考えても、ヒトの祖先や野生環境でのヒトは、食物である動植物の属性を知っている必要があったし、また体の健康に配慮しなくてはならなかったはずだから、素朴生物学の知識自体が遺伝子に書き込まれてはいないにせよ、それを獲得するための生得的制約が我々にも備わっている可能性は十分あるだろう。実際、幼児を対象にしてこれまで行ってきた多くの実験で、5才ですでに、動植物を人工物からかなりの確に区別しうる。患者と接触したり汚染された食べ物を食べると病気になる、ただし日頃から活力を養っておけば予防できる、などの認識も成立している。しかし、だからといって、子どもや専門教育を受けていない大人が、生物学の基本概念を容易に理解するかというと、決してそうではない。なかでも、ダーウィンの観点を進化を理解することは極めてむずかしいこと、突然変異、自然選択の理解は大学生でも低いことが北米、ヨーロッパを中心とするこれまでの研究で指摘されている。

その一つの理由は、素朴生物学がラマルクのだからではあるまいか。子どもも素人の大人も、生物の身体構造や機能がすこしずつゆっくりと、環境に適応するよう変化していくと考えている。しかもその変化は、ラマルクが主張したように、「必要」に基づくものであるが、「意図」により引き起こされるのではない、とする。変異はランダムに起こるのではなく、環境に適合するような方向で生ずると想定する点でもラマルク的なのである。

もう一つの理由は、宗教であろう。日本の子どもではサルから人間への進化は受け入れやすいが、天地創造説の信者にとっては、ヒトが神の手によりつくられたのではなく、サルとの共通の祖先から進化してきたという知識は、とうてい受け入れがたい。その意味では、日本のほうが進化認知科学の普及には有利かもしれない。

(より詳しい話や文献は、近く共立出版の「認知科学の探究」シリーズで刊行される『子どもの概念発達と変化—素朴生物学をめぐる』を参照されたい)

Contents

進化の理解はなぜ困難か	1
乳幼児実験室の紹介	2
本プログラムの教育活動	4
プログラムの近況(2004年12月~2005年3月)	5
研究者紹介(その4)	6
これまでの活動報告	7

乳幼児実験室の紹介

「心とことば—進化認知科学的展開」プロジェクトのひとつとして設けられた乳幼児実験室 [infant lab] こと【赤ちゃんラボ】は本プロジェクト事務室の隣にあり、名前のとおり乳児（生後6～12ヶ月）や幼児（～3歳）を対象に、主に自己やメディア・人工物の認識を中心とした調査を行っています。

乳幼児を対象に実験室調査を行う場合には、成人相手とはまた違った配慮が必要となります。というのも、赤ちゃんは自らが置かれた状況に敏感であり、同時に保護者の緊張や不安をも感じってしまうからです。【赤ちゃんラボ】は、赤ちゃんも保護者の方も安心して参加いただけるよう、できるだけ「実験室っぽさ」を除くかたちで作られています（下写真）。例えばラボ全域は土足禁止のフローリング敷きになっていますので、自宅や保育園のように赤ちゃんがハイハイしたり歩きまわったりできますし、冷蔵庫や電気ポットなどを備



えていますので、赤ちゃんの急な哺乳やおやつ・オムツ交換にも対応することができます。また、調査そのものが赤ちゃんに及ぼす影響を懸念される保護者の方も多いため、調査前の説明に加えて調査後に結果をお知らせすることで不安を取り除けるように配慮しています。さらに、赤ちゃんを連れての外出は保護者の方に少なからぬ負担をかけるため、調査に参加してくださった方には謝礼のほかにプリクラを作成してプレゼントしています。これらのサービスはとても好評で、参加してくださった方から、口コミでママ友達を紹介いただくことも増えてきました。基本的に赤ちゃんの募集は住民票を基にダイレクトメールを送ってお願いするのですが、参加して下さるのは1割ほどにすぎません。本当に些細なことの積み重ねではありますが、ひとりひとりの参加者の方を大切にすることで、より多くの方に快く参加していただけるように勤めています。

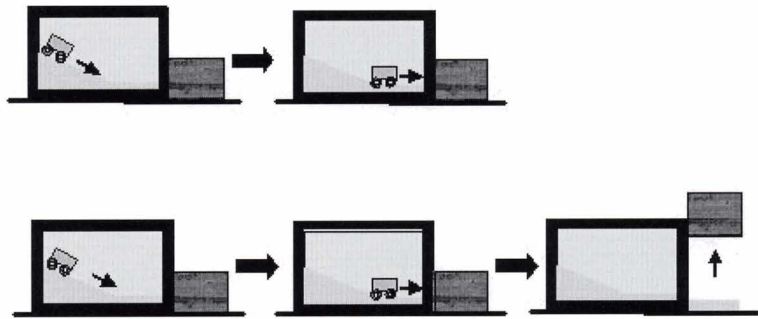
ところで、まだ言葉も喋れない赤ちゃんを一体どのように調べるのでしょうか？赤ちゃんラボで行っている調査は、大きくわけて行動指標、生理指標、そして脳イメージングを用いた実験にわけることができます。行動指標を用いた実験では、乳児の場合は「選好注視法」「馴化脱馴化法」や「期待違反法」といったパラダイムを用い、「注視時間」すなわち赤ちゃんがどこをどのくらい見ていたかという時間を測定することで、赤ちゃんの考えを推測します（左下写真）。幼児の場合はより直接的で、「模倣課題」あるいは「ステッカー課題」といった課題を用い、真似ができるか・貼られているステッカーがとれるかどうかを調べます（中央下写真）。一方、行動指標には現れない乳児の変化を調べるため、皮膚電極を用いて心拍やSCR（皮膚コンダクタンス反応）といった生理指標を測定しています。これらの指標を用いることで、乳児の馴化脱馴化などをより精緻に調べることができます。脳イメージングとしてはNIRS（近赤外分光法）という手法を用いています。これは頭表面に近赤外光を当て、その反射光を調べることで脳内の血流量を測定し、そこから脳の活動状況を調べるものです（右下写真）。他の脳イメージング手法よりも被験者にかかる負担が少ないため、乳児でも長時間測定できる利点があります。



現在、赤ちゃんラボでは以上の指標を単独で、または組み合わせてさまざまな実験を行っていますが、その中でも大きなテーマになっているのが「時空間的な自己認知の発達」と「乳幼児の発達とテレビや人工物のかかわり」です。どちらも興味深い内容なのですが、ページの都合上、本稿では主に後者について紹介をしたいと思います。昨今、テレビやゲームが子供に与える影響が社会的な問題として提起されていますが、実際に乳幼児がテレビやゲーム、またロボットといったものをそもそもどのように認識しているかという研究はまだあまり多くはありません。私たちはテレビやロボットといった人工物を赤ちゃんがいつごろから、またどのように認識しているのかを実験的に検討しています。今回は過去に行った調査の中から、「乳児がテレビに映っているものを現実だと認識しているかどうか」の調査と、「乳児がヒューマノイドロボットをコミュニケーション対象としてふさわしいと認識するか」という二つの調査を紹介します。

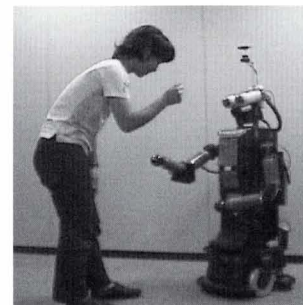
I. 乳児はテレビに映っているものを「現実のもの」だと認知するか？

この調査では、「テレビ」または「実物」の「画面の片端からおもちゃの車を転がして反対側の端から消える」という事象を赤ちゃんに見てもらい、テレビの脇に設けられたスクリーンの裏に実物のおもちゃがあると予想しているかどうか、注視時間を用いた馴化脱馴化法で調べました（下図）。赤ちゃんがテレビの中を動いていたおもちゃが実際に現れると予想していれば、おもちゃが現れなかった場合には驚いて長く注視するはずですが。結果、10ヶ月児は実物のおもちゃが出てこなかった場合は驚くのに対し、テレビの中のおもちゃが出てこなくても驚かないことが判りました。一方、生後6ヶ月児や8ヶ月児ではこのような差はみられなかったことから、赤ちゃんがテレビの中の出来事と現実とを区別するのは10ヶ月児ぐらいであるとわかりました。また、コンピュータグラフィックスを用いて同様の実験を行うと、8ヶ月児でも区別できていることがわかりました。



II. 乳児はヒューマノイドロボットを話し相手にふさわしいと思うか？

過去の研究から、赤ちゃんは「人間の話す相手になるのは人間だけで、ただのモノは対象にならない」ことを理解していると言われていました。しかしヒューマノイドロボットは人間に近い形状を持ち、かつ人間のように振舞うことが可能です（右下写真）。普通の「モノ」とは異なるロボットを、乳児が人間の話し相手として期待するかどうかを、注視時間を指標とした期待違反法で調べました。赤ちゃんには「人間の話す相手として人間がでてくる」映像と「ロボットがでてくる」映像を見せました。ロボットが人間の話し相手になれると予想していなければ、赤ちゃんはロボットがでてきたときにびっくりして長く注視するはずですが。結果、生後10ヶ月の乳児はヒューマノイドロボットの中でも人間とインタラクティブに振舞うものだけを、人間の話し相手としてふさわしいと考えていることがわかりました。現在はさらにこのような認識が生後何ヶ月くらいから可能になるのか、また外見や行動パターンが及ぼす影響について検討しています。



今後の日本社会において、乳幼児の数がさらに減少する一方、科学技術の発展に伴ってより人工物に満ちた生育環境に置かれることが予想されています。赤ちゃんラボでは、今まで経験則でしか語られてこなかった赤ちゃんとメディア・人工物の係わり合いを実験的に調べることで、社会的にも重要な研究を行っていきたいと考えています。

本プログラムの教育活動

前号以降の教育プログラムとしては、進化認知科学連続セミナー2004の後半が実施された。この連続セミナーは、COEのメンバーだけでなく東京大学に学内公開されているが、学生諸君は東京大学教養学部生命・認知科学科および文学部心理学専修の講義科目として履修できる。講義の受講者は、毎回、講師（話題提供者）から指示のあるテーマについてミニレポートを提出するだけでなく、学期末に総括のレポートを提出することによって単位を取得する。近況報告にも述べたように、この講義は約180名もの受講者があり、専門科目としては異例といってよい盛況であった（座席数250人規模の教室で毎回、立ち見者ができるほどだった）。各回とも冒頭に、コーディネータ（長谷川）が講師の紹介を行うとともに、講演内容と進化認知科学との関連について簡単に説明した。講演は50～60分程度でまとめていただき、最後の10～20分を質疑の時間に充てた。出席している関連分野の教員、PD、院生が専門的立場から質問することが多かったが、毎回、学部学生からの率直な疑問や意見も活発であった。シリーズ後半の講師と演題は次の通りである。

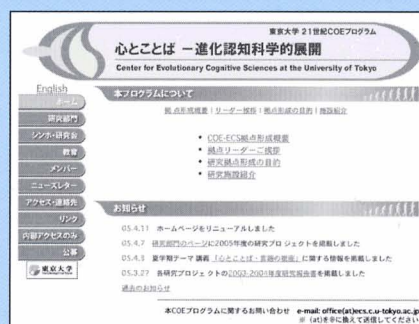
- ・ 神尾陽子 (九州大) 「社会性の発達の起源：自閉症を通して見えてくるもの」
- ・ 長谷川真理子 (早稲田大) 「殺人の行動生態学」
- ・ 平石界 (東京大) 「ヒトは合理的存在か？進化心理学による思考研究へのインパクト」
- ・ 波多野諄余夫 (放送大) 「領域固有の生得的制約に関する進化認知科学的考察」
- ・ 内田亮子 (早稲田大) 「『人種』とは？」
- ・ 菊水健史 (東京大) 「不安と攻撃の生物学的メカニズム」

主題（素材）は人文社会系になじみのものであっても、自然科学からのアプローチ「調理する」ものが並んでいるのがお分かりになるだろう。以下、最終レポートからの受講者の感想を紹介しよう（括弧内は専攻名）。正の評価が大多数だったので、2005年シリーズに繋げていきたい。

「諸学問が融合し、人間とは何かという究極的な謎の解明に向かっていくという発想は非常に好奇心を誘い、その未来には大いに期待したくなる。（言語情報科学）」「殺意や攻撃を文系的にとらえず、進化の面でもとらえて意味付けする理論が興味深かった。（社会心理）」「融合型人間科学の研究を紹介していく講義は、文理に関係なく知的好奇心に働きかける。（社会学）」「今後の勉強の目標を明確にするのに役立った。また、この講義には学部生だけでなく、院生や教官も来ていたので、他の機会よりも学ぶことが多かった。（認知行動科学）」「学問はそれぞれの専門を持ちながらも、重なり合っている部分も多く、そこへの視点が大切だということが強く感じられた。（言語情報科学）」「オムニバス形式の講義の最大の特徴である幅の広さを十分に活かしたものだ。一般教養的な立場から見ても面白い講義だった。（心理学）」「国際的な知見に立った様々な分野の先端的研究に触れることができた。歴史も同じ人間の行動の所産なのだから講義されたことを応用しつつ学んで行きたい。（西洋史）」

(長谷川寿一、拠点リーダー)

ホームページをリニューアルして、速く、見やすく、内容を充実しました。



URLは、<http://ecs.c.u-tokyo.ac.jp>です。是非アクセスして下さい。

プログラムの近況

(2004年12月～2005年3月)

本COEでは、事業推進担当者と主専攻である言語情報科学専攻の教員に対してプロジェクト形式で研究テーマを募り、院生、ポスドクと一体となった研究体制で研究を進めている。2004年度には24のプロジェクトが進行中であり、その成果を多くの方に知っていただくよう、3月にホームページの更新作業を行った。ネットで「心とことば」と検索をかけていただくと、ほとんどの場合トップに本COEのURLが出てくるので、ぜひアクセスしていただきたい。このホームページでは、シンポジウム・研究会・講演会の情報や、学部、大学院向けの教育プログラム、メンバーの業績などもご覧いただける。私どものホームページは、院生とポスドクによる手作りなので、他のCOEのように立派な構えはしていないが、その分、情報へのアクセスのよさを心がけている。今後は、英語ページを充実させて、文字通り海外へ発信していきたい。

また2004-2005年度の報告書を、コンパクトな概要報告書と、比較的大部な代表業績論文集という形で印刷中である。ご希望の方は、COEオフィスまでご一報いただければお送りする（メールアドレスは、office@ecs.c.u-tokyo.ac.jp。電話、FAX、郵便でも結構です。無料。ただし論文集は部数に限りがあります。）。

学部向けの教育プログラムも兼ねている進化認知科学連続セミナー2004は、全13回を無事終えることができた。最終レポートまで提出した受講者は約180名で、最後の「不安と攻撃の生物学的メカニズム」まで教室は「満員御礼」状態が続いた。レポートでは、この連続セミナーに対する評価を書いてももらったが、「理系と文系の交流の必要性を感じた」「人は生物であり、進化的存在であることをあらためて考えさせられた」といった声が数多く聴かれた。一方、「毎回、ハンドアウトが欲しい」「プレゼンの量が多すぎる」という注文もあったので連続セミナー2005を運営する際に活かしていきたい。このセミナーの番外編として西ワシントン大学の文化人類学者、Dawn Prince-Hughes博士に講演をいただいた（12月8日）。博士はご自身がアスペルガー症候群（高機能自閉症）であるが、障害を抱えいくつもの試練を乗り越えながらも、どのように自閉症者の心の理解にたどり着いたかを感動的に語られた（現在、彼女の自伝がハリウッドで映画化中とのことである）。

このCOEの中でも自閉症者の心理（とくに他者理解）に関する研究を進めてきたが、このチームを実質的に引っ張ってきた千住淳君が学位を取得すると同時に、東京大学総長賞を受賞した。昨年度の国際ワークショップの企画や運営でも活躍したことも評価対象だった。また、COEのラボで心理言語学のテーマで卒業論文をまとめた金丸一郎君も、成績優秀者として東京大学教養学部一高記念賞をいただいた。本COEが若手の育成にいささかなりとも貢献できたことを喜びたい。年度末で、多くの方が新しい研究環境へとばたかれ、4月には新しいメンバーを迎える。引き続き、若い諸君が伸び伸びと研究できる環境作りに励んでいきたい。

（長谷川寿一、拠点リーダー）

研究者紹介 (その4)

諏訪 元 (人間進化学部門)

研究内容を一言でまとめると?

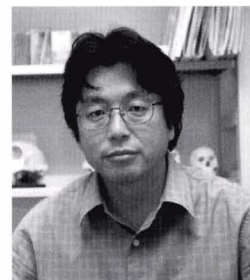
人類の系統が類人猿からどのように生じたのか、その後どのように進化し、我々を含む新人段階に至ったのか、その遠大な進化の道筋を、化石といった実証的な記録をもとに正確に理解したいと思っています。実際にはアフリカにおいて化石の採集・発掘調査に従事したり、他の化石資料、現生の類人猿、現代人などの骨格標本と比較したり、ハイテク機器で形状データを取得・解析したりしながら、人類化石資料の解釈を進めています。

COEでは主にどのような研究を行っていますか?

ここ10年間に蓄積してきたエチオピア産の人類化石を中心に、人類進化の節目に新たな情報をもたらす化石資料の解析を進めています。焦点は大きく二つ設けていて、ひとつは人類起源期そのものに関する研究であり、もう一つはホモ属の中で新人に至る過程で頭蓋設計の変化がいかに起こったかを究明することです。

前者としては、570万年前のカダバ猿人と440万年前のラムダス猿人に関する基礎的研究を進めている中、マイクロCT装置を駆使し、特に歯の化石について、先進的なポリウムデータ化とそれに基づく3次元形状解析を進めています。方法的な詰めと予備的な比較観察がようやく終わりつつあり、いよいよラムダスとカダバそのものの解釈に本腰をいれたいと思っています。チンパンジーとの分岐した直後の人類とはいかなるものだったのか、その実状にせまりつつあります。

また、国内の古人骨資料、現代人資料などを比較サンプルとしながら、16万年前の最古のホモ・サピエンスの頭蓋骨化石の研究にも従事しています。昨年秋、その化石頭骨のマイクロCT撮影を実施し、今はそのデータを少しずつ解析しています。まずは、脳容量を正確に推定したり、眼窩上の骨の突出度を調査したりする予定です。



坪井 栄治郎 (統合言語科学部門)

研究内容を一言でまとめると?

現代英語と現代日本語を主な分析対象として、動詞などの述語によって言語化される「意味」がどのような性質のものであり、それが表現形式とどのように関係しているのか、それぞれの言語の間にどのような差があり、それがそれぞれの言語全体の特徴とどのように関係しているのか、といったことを研究しています。

COEでは主にどのような研究を行っていますか?

人間の言語には、言語ごとに異なる多様性と、多様性を越えて存在する普遍性の両面があります。私はこのCOEでは、この言語の多様性と普遍性の関係というより包括的な研究テーマに貢献することを目的として、受動構文を研究対象として選び、その個別相と普遍相について研究しています。

同じ受動構文という名称で呼ばれていても、実は言語ごとに様々な点で異なりがあり、例えば日本語と英語で比べてもずいぶん違う点がいっぱいあります。このため、「受動構文」というものが個別の言語においてどのような形で存在しているのかを調べ、それがそれぞれの言語のどのような性質と結びついているのか、他の言語現象とどう関係しているのか、といった点を明らかにすることが必要になるわけですが、私は主に日本語と英語の受動構文についてそうした観点から研究を行っています。それと同時に、そうした言語ごとの様々な異なりにもかかわらず「受動構文」という共通の名称が用いられる時に想定されている共通性・普遍性をどのようなものとして了解し、どのように扱うべきなのかについて考えることも重要であり、すべての言語の受動構文と呼ばれているものを共通の土台にのせて論じることを可能にする枠組みのあるべき形についても研究しています。



中澤 恒子 (計算言語科学部門)

研究内容を一言でまとめると?

統語論、意味論と言われる分野で、ヒトの言語計算能力に興味を持っています。ことばを産出するためには、語彙についての知識(蓄積されたデータベース)と、語を組み合わせて文を作るための操作(文法規則に基づく計算処理)が必要ですが、それらのデータベースや処理規則を計算機でも扱えるような方式で形式化する研究を行い、ヒトの言語計算能力のモデル化を目指しています。

COEでは主にどのような研究を行っていますか?

「来る」「行く」など、空間移動を表す直示的表現における、言語の普遍性と多様性を調べています。友達を誘うのに、日本語なら「明日私のうちに来て」ですが、なぜ錫伯語では「明日私のうちに行く」と言うのでしょうか。日本語で「太郎はもう来たけれどまだ着かない」と言うのと、もう着いたのか、まだ着いていないのか意味がわかりませんが、中国語では、まだ着いていないという意味になります。(日本語でも、「もう行ったけれど、まだ着かない」はまだ着いていないという意味です。)直示的表現とは、物理的には同じ動作(または物)を指すが、それに加えて話者の視点が反映された表現のことで、どの言語にも存在します。ところが、実際に使われる直示表現には、上記のように言語によって多様性があり、話者の視点以外にも言語特有の関係要因があることがわかります。これらの、言語によって異なる、しかしごく少数の限られた要因を突きとめて、それらが相互に作用する規則性を調べています。



活動報告

1 COE研究発表会(事業推進者等の研究発表・討論会)

第19回 COE研究会(PDとRAの研究発表会)

日時：2004年12月27日(月)午後2時～4時半
 場所：3号館113号室(生命・認知科学科講義室)
 発表者：南部美砂子、酒井智宏、塩野直之、小林由紀、川島尊之、高橋麻理子、松田 剛、大江朋子、伊藤 匡、森脇愛子、西岡朋生、角 惠理

第20回 COE研究会 進化認知科学連続セミナー2004

日時：2004年12月1日(水)
 場所：12号館1225室
 演者：神尾陽子(九州大)
 演題：「社会性の発達の起源：自閉症を通して見えてくるもの」
 概要：私たちの複雑な社会生活を支える社会性を、私たちはどのようにして身につけたのか。そしてそれを可能にする脳の発達基盤とは何なのか。当たり前であるから見えてこない「社会性」の本態を、自閉症という発達障害の病態解明を通して概説した。

第21回 COE研究会 進化認知科学連続セミナー2004

日時：2004年12月8日(水)
 場所：12号館1225室
 演者：長谷川眞理子(早稲田大)
 演題：「殺人の行動生態学」
 概要：殺人は倫理的に許されない反社会的行為であるが、ヒトを殺人に駆り立てる動機づけは、殺人者だけに固有なものとはいえない。ここでは、主に性選択理論から予測される殺人パタンを実証的に検証し、殺人行動の普遍性を示すとともに、社会・文化による影響を考察した。

第22回 COE研究会 進化認知科学連続セミナー2004

日時：2004年12月8日(水)
 場所：3号館113室
 演者：Dawn Prince-Hughes(西ワシントン大)
 演題：「ゴリラの国の歌(Songs of the Gorilla Nation)」
 概要：この講演会では、彼女自身の持つアスペルガー症候群から見た世界や、彼女が動物園でゴリラを観察することを通じて学んだ自分の障害に対する対処法を語っていただいた。彼女の著書「Songs of the Gorilla Nation」は、彼女の自伝であり、映画化が予定されている。

第23回 COE研究会 進化認知科学連続セミナー2004

日時：2004年12月15日(水)
 場所：12号館1225室
 演者：平石界(東京大)
 演題：「ヒトは合理的存在か？進化心理学による思考研究へのインパクト」
 概要：本講義では進化心理学のアプローチによって行われてきた思考研究と、それが引き起こしてきた議論をレビューすることで、進化的視点を取ることが、人間の「合理性」に対してどのような見方をもたらすか議論した。

第24回 COE研究会 進化認知科学連続セミナー2004

日時：2004年12月22日(水)
 場所：12号館1225室
 演者：波多野諠余夫(放送大)
 演題：「領域固有の生得的制約に関する進化認知科学的考察」
 概要：最近の認知発達研究では、文法や自然数の体系といった構造的知識に加えて、物体の運動に関する素朴物理学、ヒトの意図的行為についての素朴心理学ないし「心の理論」、ヒトの身体や動植物を扱う素朴生物学など、世界のいくつかの側面に関する因果的知識についても、領域固有の生得的制約が働いているため、乳幼児が早期に、容易にかつ普遍的にこれらを獲得しう

と主張する学者が多い。このトークでは、こうした領域固有の生得的制約の性格やそれを進化といかに関連づけるかに関する議論を整理した。

第25回 COE研究会 進化認知科学連続セミナー2004

日時：2005年1月12日(水)
 場所：12号館1225室
 演者：内田亮子(早稲田大)
 演題：「『人種』とは？」
 概要：現生人の「人種」分類に生物学的根拠はない。一方、「人種」概念の存在は、西洋の社会的構築物説だけで説明できない。進化生物学、認知科学、人類学の研究成果を踏まえ、私達の「心」にある「人種」について考察した。

第26回 COE研究会 進化認知科学連続セミナー2004

日時：2005年1月19日(水)
 場所：12号館1225室
 演者：菊水健史(東京大)
 演題：「不安と攻撃の生物学的メカニズム」
 概要：一般的に不安や攻撃という用語は印象の良いものではないかもしれない。しかし生物学に目を向けるとこれらの行動は個体の生存と繁殖戦略になくはならない要素である。不安と攻撃がどのように発達していくかを生物学的知見、特に遺伝子と環境の両者から解いてみた。

2 COEシンポジウム・セミナー(共催のものも含む)

第18回：共催シンポジウム：日韓対照研究会

日時：2004年12月11日 午後1時半～5時
 場所：駒場キャンパス10号館301会議室
 責任者：生越直樹
 招待講演：鷲尾龍一「韓国語における被動形式の機能と起源に関する類型論的考察」
 概要：多くの統辞論的類似性を共有する韓国語と日本語にあって、被動表現の形式と機能には際立った相違点が見られる。従来より指摘されている自動詞の被動化可否などは、より一般的な《排除被動》の可否に還元できるものと考えられるが、他の言語特性への還元を容易には許さない類の差異も存在する。韓国語における《被動形式の多様性》は、そのような特質の一つである。すなわち、(1) -i (-hi-, -li-, -ki-), (2) ci-ta-, (3) toy-ta-, (4) pat-ta-, (5) tangha-ta-などに基づく被動表現は、日本語では接辞 -rare- に基づく単一の形式に収斂するのであるが、韓国語という言語が被動形式を細分化させた理由を原理的に説明するのは、現時点では困難であると言わざるを得ない。したがって、この多様性自体は所与のものとして認めることになるが、(1)～(5)の諸形式は、それぞれの成り立ちを反映した固有の性質を備えているため、これらの形式を対比させることにより、被動の《形式》(あるいは《構成》)に由来する特性を明らかにするという、日本語のような言語では行ないにくい研究が韓国語では可能となる。本発表では、上記(1)～(5)の諸形式のうち、ci-ta 被動文とtoy-ta被動文のみに見られる性質Pを抽出し、これがゲルマン諸語の被動表現にも共通する性質であることを示した。その上で、Pが特定の被動構成を反映している可能性について論じ、(1)や(4)/(5)がPを欠くという事実が、被動構成の違いに由来するものであることを示した。一方、接辞 -rare- に基づく日本語被動文と、韓国語の接辞被動と同様にPを欠く構文であるが、以上のような観点からすると、これは日本語被動文がゲルマン諸語の被動表現とは本質的に異なる構成であることを示唆するものであり、接辞 -rare- の起源に関して広く行なわれている語源論に対し、

重要な問題を提起することになる。
学生発表：円山拓子「韓国語の「状態変化」を表す補助動詞jida-受身・自発とのつながり」、尹盛熙「韓国語の形式動詞「hata(する)」に関する一考察」

第19回：COE主催公開セミナー

日時：2005年1月7日(金)午後2時～3時半
場所：駒場キャンパス3号館113室
担当：長谷川寿一
演者：Dr. Jan de Ruiter (DURHAM大学人類学部・講師)
演題：Social structure and population-genetic structure of the Sumatran orang-utan <スマトラ・オランウータンの社会構造と個体群の遺伝構造>

話題提供：河村正二(東京大学新領域)「霊長類を中心とした色覚の遺伝子と行動の関係」

第20回：COE共催シンポジウム：臨床心理学と社会心理学の接点の来し方・行く末

日時：2005年3月12日 午後3時
場所：駒場キャンパス2号館
担当：丹野義彦
司会：坂本真士(日本大学)

話題提供：木島伸彦(慶應義塾大学)、友田貴子(埼玉工業大学)、富重健一(武蔵野大学)、高比良美詠子(メディア教育開発センター)、田中 江里子(労働科学研究所)、増田真也(慶應義塾大学)、杉山崇(山梨英和大学)、松田英子(江戸川大学)、佐藤健二(徳島大学)、丹野義彦(東京大学)

第21回：COE主催公開セミナー：大型類人猿の認知能力とその発達

日時：2005年3月16日(水) 午後4時～6時30分
場所：駒場キャンパス3号館113号室
担当：長谷川寿一

話題提供：上野有理(COE「心とことば」)、須田知佳子(マックスプランク進化人類学研究所)

第22回：COE主催公開シンポジウム：語彙概念構造辞書の構築と応用

日時：2005年3月23日(水) 午前9時半～午後5時10分
場所：駒場キャンパス アドミニストレーション棟 学際交流ホール

担当：伊藤たかね、加藤恒昭
概要：東京大学21世紀COE「心とことば」の一環として、言語学と言語工学の融合をめざし、多くの分野の研究者の皆様にご利用いただける言語資源提供を視野に入れ、日本語の語彙概念構造について研究を進めている。今年度の成果として日本語和語動詞約1000語からなる語彙概念構造辞書(2004年版)が完成した。この機会に、多くの皆様に語彙概念構造や我々の取り組みについて知っていただくともに、関連研究者のご意見をいただく場を企画した。本シンポジウムでは、我々の試みや関連研究の発表だけでなく、語彙概念構造についてのチュートリアルをはじめとして、研究の最前線や、先行プロジェクトのご紹介、語彙概念構造や語彙意味論を用いた幾つかの研究についてのご発表をお願いした。

チュートリアル講演「語彙概念構造とは」、演者：伊藤たかね(東京大学)

特別講演「語彙概念構造研究の最前線：擬態語(オノマトペ)動詞の意味と統語を中心に」、演者：影山太郎(関西学院大学)

プロジェクト報告「実証的な語彙概念構造辞書の構築に向けて」、加藤恒昭、畠山真一、坂本浩、伊

藤たかね(東京大学)、「言語処理を意識した語彙概念構造の構築」、竹内孔一(岡山大学)

研究報告：「Generative Lexiconの枠組みに基づく名詞の概念辞書の構築」、高橋幸(熊本大学)、李相穆、佐藤滋(東北大学国際文化研究科)、「語彙概念構造で表現できる言い換え」、藤田 篤(奈良先端科学技術大学院大学)、乾健太郎、松本裕治、「LCSと動詞の多義性」、畠山真一、坂本浩、加藤恒昭、伊藤たかね(東京大学)、「動詞識別テストとしての「てある」構文の有効性」、坂本浩、 畠山真一、加藤恒昭、伊藤たかね(東京大学)

第23回：COE主催公開講演会

日時：2005年3月26日(土) 正午～午後2時
場所：駒場キャンパス学際交流ホール
担当：大堀壽夫

演者：Michael Tomasello (Max Planck Institute for Evolutionary Anthropology)

演題：Constructing a Language

3 COE主催・共催研究会

第32回：COE共催研究会：意味論研究会

担当：Christopher TANCREDI
日時：2004年11月26日(金)午後3:30
場所：駒場キャンパス10号館3階会議室
演者：石原慎一郎 (Universitaet Potsdam)
演者：塩原佳代乃 (お茶の水女子大学)
演題：From Focus, via Prosody, to Syntax

第33回：COE共催研究会・東京音韻論研究会

日時：2004年12月12日(日) 午後1時
会場：駒場キャンパス10号館301会議室
担当：田中伸一
発表者1：高野京子(東京大学大学院)
論文紹介：McCarthy, J. (2004) Head Spans and Autosegmental Spreading. ms., UMass
発表者2：田中伸一(東京大学)
発表題目：Against Gradient Alignment Directionality, Degeneracy and Asymmetries in the Typology of Stress Systems

第34回：COE共催研究会：意味論研究会

担当：Christopher TANCREDI
日時：2005年1月7日(金)午後3:30
場所：駒場キャンパス10号館3階会議室
演者：中西公子 (University of Connecticut)
演題：Some Comparative Constructions in Japanese
演者：小田登志子 (東京経済大学)
演題：Semantics of Exclamatives、

第35回：COE共催研究会・東京音韻論研究会

日時：2005年1月23日(日) 午後1時
会場：駒場キャンパス10号館301会議室
担当：田中伸一
発表者1：吉田健二(松蔭女子大学)
発表題目：「韓国語の鼻子音の非鼻音化と韻律構造」
発表者2：太田聡(山口大学)
発表題目：「屈折と音の関係についての雑ノート」

第36回：COE共催研究会：意味論研究会

担当：Christopher TANCREDI
日時：2005年1月28日(金)午後4時半
場所：国立情報学研究所(学術総合センター内)12階講義室1
演者：Stefan Kaufmann (Northwestern University)
演題：Local and Global Interpretations of Conditionals

東京大学 21世紀COE「心とことば」進化認知科学的展開

〒153-8902 東京都目黒区駒場3丁目8番1号
東京大学駒場キャンパス17号館
TEL/FAX 03-5454-6709
ホームページ <http://ecs.c.u-tokyo.ac.jp>
発行日 2005年3月31日